

Title	純粹國家(其一基本團體)
Author(s)	作田, 莊一
Citation	經濟論叢 (1927), 24(5): 834-855
Issue Date	1927-05-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/128538
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 五 第

卷四十二第

行發日一月五年二和昭

論 叢

分配論の性質

九州帝國大學
教授 文學博士

高田 保馬

中世の港

教授 文學博士

三浦 周行

勤勉獎勵目的の課税

教授 法學博士

神戸 正雄

純粹國家

助教授 學士

作田 莊一

說 苑

ロッシェーミハーゲル哲學

講師 文學博士

米田 庄太郎

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田島 錦治

琉球最後の王朝とヘルリ提督

教授 法學博士

山本 美越乃

雜 錄

指數の形式と指數の目的

助教授 經濟學士

蜷川 虎三

比較性なき統計的計數

經濟學士

菊田 太郎

法 令

銀行法・震災手形損失補償公債法・震災手形善後處理法・兌換銀行券整理法・公益質屋法・海外移住組合法・輸出絹織物取締法

純粹國家 (其基本圖體)

作田莊一

國家そのものを問題として私見を發表することは、研究の極めて未熟なる私にとつては甚だ危険なことであり、又それは經濟學を研究する者にとつては無用の業であるかのやうに受取られるかも知れぬ。併し私は、國民經濟は國家意志の統制に依る綜合經濟であるといふ見解を執つて居るから、國家の本質を明かにすることは經濟學の研究にとつても極めて重要な前提となる。殊に現時の經濟實踐論は國家を中心として争はれて居ると云つてもよからふ。現代の資本經濟に關する研究は、單にその現實相を究明するに止まらないで、資本經濟に對する批判が、階級の立場より行はるべきか、將た國家の立場より行はるべきかを問題の焦點としなくてはならぬ。蓋しかゝる批判をなし得る意志は階級と國家とのみ存するからである。而してこの實踐論上の問題を解釋するには、先づ現實論上の問題として現に存在する國家が何であるかを明かにしなければならぬ。國家の本質を明かにすることは、經濟學の研究者にとつても正に緊急にして避くべからざる課題となつて來た。これ私が研究の極めて粗雑なることを自識しながら

らも、敢えてこの一篇を草し、切に先覺の指教を仰ぐ所以である。

本稿は掲載の便宜の爲めこれを三つに分ちて、其一基本團體・其二國家と社會・其三純粹國家となし、この順序を追ふて本題の解釋を試みるであらふ。

一 人生の分析

人生は渾然たる一つの現實である。然るにこの一つのを最初から一つのものとして、明確に廣く見渡し深く見通はすと云ふことは、我等の能力が許さない。そこで我等はこの一つの人生を分析して種々の方面を抜き出し、一定の限界と制約との下に抽象態を構成して、それ等の一々を見盡くし見極めようとする。この分析・抽出の方法を段々と進めて行けば、終には我等が現に具へる能力の限度に應じて、もはや進み得ない所の不可分態に到達する。その後は是までと反對の方向を執つて、抽象態である一々の人生の方面を元の姿に綜合し納め入れ、先きに加へたる限界と制約とを解きながら段々と、程度に於て次第に具體的な現實に還元して行く。その綜合・納入の方法を進めて終に不可合態に到達した時には、初に漠然と眼に映じたる一つの現實である人生が明かに見渡され見通はされることとなる。全景の見渡し見通はしは能力の優れたものにあつては、直覺でも出來得る。併し直覺は核心を掴み得ても實際的事物に關する體系的知識を與へ得

ない。一旦分析によつて箇々のものを見盡くし見極めた上で、更に其等を内容として綜合し來つた知識でなければ、實際を明確に見渡し見通したことはない。直覺と綜析とは研究上一を以て他に代ふることの出来ない性質のものであり、直覺は綜析を導く指針となり、運行の方法は綜析に存する。

研究上の分析及び綜合は言ふまでもなく實物の分解及び結合と趣を異にする。一の物の分解は其と異つた二以上の物を生ぜしめ、二以上の物の結合もまた其等と異つた一の物を生ぜしめる。研究上の綜析は現實に何等の變化をも與へないで、唯だ觀察の上にて分けて見、合せて見るだけである。分析は或標徴に據つて抽象態を構成する方法であるから、分析・抽出された人生の方面は、そのまゝに存在し又はそれだけ遊離して存在するものではなく、認識上一定の限界と制約との下に於て現實に存在することを承認されるに過ぎない。されどこの分析的抽象は、共通の性狀を取纏めた集約的抽象ではなく、現實に即してその或方面を取出した認識であるから、現實そのものを指してゐなくとも、それに現實性を拒むことは出来ない。従つて何處まで細かい分析を重ねればとて、それより得たる抽象態が現實性を失ふ譯なく、従つてかゝる抽象態を目して唯だ觀念の所産であるといふ批難を加へることも出来得ない譯である。但し現實は絶えず變化するから、曾て有りし現實より抽出せる抽象態を、それが今は失はれ居る現實にも尙存するが如く見謬

つてはならないと同時に、また、過去の現實に即いて分析せるときに無かつたからとて、その分析的知識を固執して現在に現はれ來れる現實の或方面を無視してはならない。分析の對象には短命のものもあり長命のものもある。我等は已に死せるものを尙生き居ると見たり、尙生き居るものを已に死せるものと見るやうな誤謬を避け、常に生氣ある現實に對面しなければならぬ。歴史的研究にあつてもまた、その對象とせる時代に於ける生ける現實を捉へなければならぬ。

次に又我等が實踐的批判の態度を執り、實踐の適合如何を判定する場合には、その適合判定の内容となるべき存在認定の知識を吟味しなければならぬ。その際に十分を言へば、分析的抽象の知識を採らないで、更に綜合し還元したる具體的現實の知識を以て判定の内容としなければならぬが、さればとて現實に關する抽象的知識が、單に抽象態なるの故を以て實踐論的研究に役立たないと云ふ譯ではない。人生の一部分を研究對象とする科學は、その性質の上から是非とも抽象論を以て始終せざるを得ない。唯だ肝要な點は、若し抽象態を採つて現實に對する批判を試みる場合には、それに與へられたる認識上の一定の限界と制約とを守つてその分を越えないことにある。

私が今問題とする純粹國家は現實を分析することによつて抽出したる一の抽象態である。それは如何なるものであるか、そういうものが現實の人生の何處に存在するか。この小篇はそれの本

質と所在とを明かにしようとする一つの試みである。

二 人生の通相と人生の境涯

人生とは何であるか。一切の分析を加へない所の單純・素朴の見解としては、人は生きて居ると云ふ外には人生に就て語り得ない。この最も原始的なる見解より出發して人生の分析を試みるならば、人生は先づ存在の態様によつて人生の通相と人生の境涯とに大別され得る。凡そ我等人間の生活は何であるかと問ひ、箇々人が互に又は其々にする生活の狀態を看過して、單に人が何者であり何事を爲すかに着眼するときは、これを人生の通相と名づける。然るに人生は一つの現實であるとは云ひながら、その内容は箇々人が相互に又は共同して行動する生活として現はれ、人々の間に種々の關係が結ばれ交渉が行はれて居るから、この關係や交渉に注目するときは、これを人生の境涯と云ふ。

人生の通相は人生一般を指すのであるが、併し其は箇々人の生活に就て共通點を集約せる意味ではなく、寧ろ箇々人が如何なる生活を營むかを尋ねるよりも先きに、唯だ人は何であり何を爲すかの普通の相を直接に見たものである。例へば古代民族は遊行牧畜から定住牧畜に移つたとか、近代の生産が手足による作業から機械力による作業に變つたとか、コペルニクスが地動説を

考出したとか、親鸞が絶対歸依の他力宗を創立したとか云ふが如く、單に人が人としての思想や行動を看取るのが人生の通相である。故に通相は集約の意味に於ける抽象ではなく、具體的現實の人生から人々の間の關係や交渉を見逃がして、此の方面を捨象し彼の方面を取象せる意味の抽象である。又通相と云ふは人々の生活關係からその生活内容を抽出したものでなく、寧ろ觀念的には生活關係よりも先きに考へ付けられる生活内容である。これと異り人生の境涯と云ふは生活内容を看過して唯だ人々の間の關係や交渉のみを人生の中から抽出したものである。人間は常に群居し團結して生活を營んで居るから、我等の思想及び行動は一として人々の關係や交渉を離れて存するものではない。その關係や交渉が存すると知るは、一に人間の自我性の働きである。この自我性によつて我と彼とが區別されながら人々が相應酬する状態が即ち人生の境涯である。

人生の通相と境涯とは更に是等を基本的範疇たる「モノ」と「コト」とに分ち見るとき、一層明かに二者の對照を看取し得るであらふ。人生の通相は「モノ」としては人間の性格であり、「コト」としては生活の趣向である。人性は善か惡かと尋ね、動物性と人間性との異同を求め、人に神性ありや否やを問ひ、天才や天品は何であり、如何にして現れるかと云ふが如きは、皆人間の性格に就て考へるのである。我等は何を爲し居るか又何を爲すべきかと問ひ、眞正美善を求めて觀察し

考慮し制作し欣求するが如きは、これ生活の趣向に當るのである。次に人生の境涯は「モノ」としては人間の位置であり、「コト」としては生活の交渉である。人間の位置は一方では個人の我性により他方では個人間の關係によつて定まる。我性と云ふも關係と云ふもその實は同一なる人間の位置を指し、我等は種々の階段に立てる我性を具へる所の個人として存在すると同時に個人間の關係の中に存在する。蓋し世界に孤獨の人なきと同時に個人の對他的行動は常にその我性から出發するからである。尤も一々の個人に就て見れば、その我性の何たるかによつて、無我の境涯あり、主我の境涯あり、沒我の境涯あり、全我の境涯あつて、世間が苦海とも見え樂園とも見えるであらふ。有産階級に屬すると無産階級に屬するとの外的差別でさへも、多くの人々の世間觀に相違を生ぜしめる。併し我等が人生の境涯を通相と並べて見る場合には、それらの我性を有するものとしての個人に就て其等の間の關係を觀察し、その關係を結べる人間の位置如何に問題の要點を据へるのである。かゝる人間の位置に伴ふて「コト」としての生活の交渉が行はれる。人々は或は協力し或は鬭爭し、或は愛護し或は抑壓する。是處では人と人との間に何が起るかを見るのみにて、彼我を通じて人としての生活目的の實現如何は通相の方面に屬する。例へば聯合生産にあつては、生産は生活趣向であり聯合は生活交渉であり、又念佛同行と言へば、念佛は生活趣向であり同行は生活交渉である。一は生活の道行きであり、他は生活の道連れである。

人生の通相と境涯とを區別するに當つて所屬の決し難い場合は人間の地物に對する關係である。尤も人と人との間に於ても類似的疑問を生ずる。一人が他人に就て或利益を求める場合には、その利益が生活目的の内容となるのみにて、利益を與ふる他人はこれを求める一人と同位の關係に立つ。されど一人が他人の人格そのものを生活目的の内容となし他人を物と同視する場合には其の他人が一人の生活目的の内容となり、二人の間は人と人との關係とは言ひ難くなる。併し斯の如きは一人が然か思ふだけにて、人生を大觀すれば如何なる時代にても人が余く人の生活目的の内容になり切つて居る場合は無いと斷定して差支ない。奴隸制と雖も人が人を使役する支配關係に止まり人を牛馬と同様に使用したのではない。人を牛馬の如く取扱ふと言ふことさへ已に人が人を牛馬と同位に置いて居ないことを示す表現である。奴隸制は唯だ人的支配關係なるが故に解放があり得るが、牛馬には解放が認められない。斯の如きは必しも人道心によつて然るのではなく、人類の原性たる同類感情に基くのであると思ふ。

然るに人間の地物に對する場合には趣が異つて来る。地物が人間に利用される限りは、財貨の生産及び消費の如き行動は人生の通相たる生活趣向の中に收められる。されど同類感情を廣めて萬物同根の信念を懷き地物を友として待遇するとき、若くはこれを從屬者として支配するときさへ、人間と地物との關係は轉じて廣大なる人生の境涯に移るのである。この場合には人生の通相も變つて来るが、殊に地物に取圍まれた人間の位置如何は、進化論者が言ふ所の宇宙に於ける人間の位置のやうなものでなく、人生問題として極めて解釋の困難なものとなる。これに就て親鸞は惡々袈裟を着けて魚肉を食つたと言ふ傳説があるが、これは頗る苦しい答案である。唯だ好都合なことには科學の見地からは悉皆成佛と言ふやうな廣大無邊の思想を容れる餘裕がないから、科學論としては安んじて人間對地物の關係を人生の通相の中に屬せしめ得る。

神と人との關係も亦困難な問題である。超科學的知識では、この關係は人と神との相對する位置並にその間の生活交渉と見られて最も廣い人生の境涯に屬する。されど科學的見地から言へば、人が超人的實在を欣求し且これに歸依する宗教生活は一の生活趣向であつて人生の通相に屬する。

斯の如く人が神を思ひ土に働きかける生活は皆人生の通相に收められ、人生の境涯は專ら人と人との間に於ける人格的關係

及び生活交渉に止まるものと見て差支ない。

人生の通相と境涯とを區別することは極めて重大なる種々の人生問題を解釋する鍵を提供する。例へば歴史は人生の經歷であるが、これに就て歴史は種族又は階級の闘争の變遷であると言ふときには、人生の境涯を以て一應はその闘争と見做すとしても、それだけでは境涯の歴史たるに止まり、たとへ闘争の由つて來る所の事情を擧げるとしても、そのみでは通相より見たる歴史の真相は盡されて居ない。又例へば人生の理想は仁愛にあると見る思想の如きも同様である。人生の境涯に關する理想を以て一應は仁愛であると思ふとしても、これ單に境涯の理想たるに止まり通相の理想は見逃され、理想の半面が擧げられたのみである。歴史に於ても理想に於ても人生の境涯と並せて人生の通相が同位に於て示されなければならぬ。通相の一たる人間の性格に於ては、自然の性から意志の性へ、意志の性から本然の性へ、本然の性から精神の性へと進み行き、通相の二たる生活の趣向に於ては、生の保存から生の繁榮へ、生の繁榮から生の安寧へ、生の安寧から生の造化へと進み行く。一人の求道者が大覺して精神の人となるときに人類に精神が生れる。一人の學者が地動説の確信に達するときに人類が地球の動くことを知つたのである。かゝる通相に屬する精神や真理が一の個人から他の個人へと傳達される有様や、或はその逆に大衆の要求が或個人に於て實現されるが如きは、凡て人生の境涯に見られる現象である。道德論に於

ても通相道德に屬する幸福主義が輕せられるに至つた後は道德の本質を人と人との關係に置く傾向が盛んになつた。我等何を爲すべきかと問ひ、これに對して人格を尊重すべしとか人々相愛すべしとか答ふるは、唯だ境界道德に就ての一答案に過ぎない。世間並に田園に勞し工場に働く人々あり、世間と即かず離れずに、精緻なる數理や天來の音曲に一念を凝らす人々があり、出来るだけ世間、繁累から出離して只管に彼岸への更生に精進する人々すらある。是等こそ眞に我等何を爲すべきかの問に答へる人間の仕事である。我等は境界道德の外に通相道德の存することを知らなければならぬ。功利道德説は最大多數の最大幸福を主義として居る。その内容は低きに過ぐる憾みあるも、通相道德と境界道德とを綜合せる立言としてよく整ふて居る。人生の通相は世間を否定しない意味に於ける非世間的方面である。階級鬭争であれ萬人博愛であれ、これらはただ人生の行路に於ける道連れを指せるのみにて、これと同等以上大切なものは道行きの問題である。現代の人々は餘りに多く境界の問題に惱んでゐる。私も今時代の兒として境界の問題に於て述べようとして居る。もとより人生の境界を輕じてはならないが、人生には通相と境界との二面あることを確認し、境界が人生に於て如何なる意義を有するかを明かにすることは、やがて境界の問題を解釋するに就て缺ぐべからざる前提となるのである。

斯の如く人生を分析すればその通相と境界とに別たれるが、これもど一つの人生から抽出した

兩面に過ぎないから、各々一は他と絡んで共存する。されど分析し抽出するは、かくして得たる對象を特に觀察する爲であるから、我等は通相と境涯とを各々主題として人生を觀察するのである。先づ通相を主題とするときは通相が境涯に立てる有様、其が境涯に現はれる有様を觀察する。通相は必ず境涯の中に住み境涯の中に於て發展し、更に又境涯の状態如何によつてその中に現はれる通相の状態が種々相を呈する。例へば宗旨や生産は性質として人々の關係には屬しないが、而かも必ず人々の關係を通じて起り、又曾て戰亂の時代には未來淨土を欣求する宗旨が起り、今の商品提供の競争時代には能率の高い機械の發明が續出するが如し。次に境涯を主題とするときは、境涯が通相を容れる有様、其が通相を育てる有様を觀察する。境涯は必ず通相を盛り通相を開展させるが、更に又通相の状態如何によつてこれを容れて居る境涯の状態が種々に變つて來る。例へば争ひ又は親むと云ふことは此々の爲めと決まつて居る譯ではないが、併し其等は何か性格なり利益なりに關して行はれる。又生産方法が變つて來れば人々の關係たる生産組織が變り、自然科學の進歩に基き交通方法が善くなれば、交通の範圍が廣まりその關係が緊密となる。

斯の如く主として通相を見るときは境涯を併せ見るを要し、主として境涯を見るときは通相を併せ見るを要する。是等の二つの間には因果の關係はないが、共存の關係あるによつて交互に一の變化は他に變化を生ぜしめつゝ、渾然たる一つの人生を織り成すのである。然るに尙は一層進

んで通相なり境涯なりの特質を細かに見盡くし見極めようとするならば、更に進んだ分析を必要とする。即ち通相を見るに當りては、其が境涯に現はれ居る状態を看過し、境涯を捨て、通相のみを抽出し、又境涯を見るに當りては、其が通相を容れて居る状態を看過し、通相を捨て、境涯のみを抽出する。一は境涯に拘らない通相のみを題目とし、他は通相に拘らない境涯のみを題目とする。其處に抽象としての單純なる通相と單純なる境涯とが問題とされる。今はこの單純なる人生の境涯を問題とするのである。

人生の觀察は第一に人生を渾然たる一つの現實として單純に觀察する。次で第二に境涯に立てる通相を觀察し、第三に通相を容れたる境涯を觀察する。更に第四に單純の通相を觀察し、第五に單純の境涯を觀察する。是等の單純なる通相及び境涯は更に幾階段の分析によつて究明せられる。分析を終れば逆に綜合に轉じ順次に最初に見たる現實の人生に復歸する。

往路たる分析を経て還路たる綜合の或階段に至るときに一應取纏められる研究の成績は、一定の問題に關する種々の學識を構成する。第一は單純なる境涯に關するものにて、これに屬するものは謂ゆる形式社會學又は純正社會學若しくは社會關係論、純正的とも云ふべき國家學・政治學・法律學・人格的關係のみに着眼する倫理學などである。第二は單純なる通相に關するものにて、これに屬するものは論理學、美學、宗教哲學、地物利用のみに關する經濟學若しくは農工等の技術學、臨床醫學などである。第三は境涯を主題とし其が通相を收め居る状態を問題とするものにて、これに屬するものは經濟社會學、衛生社會學、藝術社會學、宗教社會學など特殊社會學と謂はれるものである。又是等の諸科學の對象を綜合的に考察するものは綜合社會學と謂はれて居る。第四は通相を主題とし其が境涯に現れる状態を問題とするものにて、これに屬するものは社會經濟學、社會醫學、社會藝術學、社會宗教學などである。是等は社會的の學問であるが社會學には屬しない。最後の第五は第三及び第四を綜合せるものにて茲に始めて人生を一つの現實と見る最高の綜合的研究が行はれ、これに屬するものは人類の歴史や人生哲學な

どである。

以上の諸問題の中、今私は分拆の第五段に當り、綜合の第一段に當る所の單純なる人生の境涯を問題とするのである。序に一言したいが、この單純境涯論はその中に含む所の通相を捨象したものであるから無論であるが、進んで通相を取入れたものでも境涯を主題とせる研究は、やはり境涯論たるに止まつて通相論を包含することはない。上述せる特殊社會科學であれ又綜合社會學であれさういふ社會科學は凡て人生の境涯を主題とせる學問であつて、人生に關する學問にはその外に通相を主題とする大なる領域がある。然るに社會科學を以て人生全般に關する學問であるかの如く見做しこれと自然科學とを對照せしめる見方もあるが、それは限界を越へて社會科學の範圍を擴大したものである。自然と社會とを對照せしめる見方が已に思想の混雜を示して居る。

三 境涯としての團體

人生の境涯は人々の關係及びこれに伴ふ生活の交渉に外ならない。この關係と交渉とは「モノ」と「コト」との係りであつて、一を離れて他は存しない。人々の關係なくしては生活の交渉は生じないと同時に、關係あれば必ず交渉を生ずる。併し今は主として關係の性質を考察し隨時に生活交渉を顧みるに止める。

人々の關係は大別すれば反對關係、連結關係との二つとなる。此外に人々が全く離れて積極的に何等の關係をも有しない消極的關係と、人々が全く融合して一體となり個別性を沒却せる超越的關係との二つが考へ得られる。併し消極的關係はその實は無關係を意味するから正面からは關

係の問題とならない。これに就ては無關係である人々の間に如何にして關係を生ずるに至るかを問題とするのみである。又超越的關係はロマンティックには考へ得られるも現實にはその例を求め難く、又全く一體となれる人々は已に精確の意味に於ける關係ではないからこれ亦關係の問題から除外する。これに就ては寧ろ如何にして關係的から超越關係的に進むことあるべきかを問題とするのである。廣い關係の概念を以て見れば其には上述の四種ありて、先づ消極的關係即ち潜在的關係が存し、其が次に反對關係に出で更に轉じて連結關係に入り、終に超越的關係に達すると云ふやうな傾向があるのではないかと思はれるが、今はその點には立入らない。今我等が正面の問題とするものは狭い意味の關係であつて、其には反對關係と連結關係との二つのみ存する。

反對と連結とは全く方向を異にする關係である。但し一の大なる連結の中に生ずる競争や抗爭は一種の反對關係に相違なきも、これは連結と並稱される反對ではない。尤も連結關係の中に於ける反對が極度に達して連結を全く解き離すまでに至れば連結に非ざる反對を生ずるが、實際にはかゝる解離は更に別の紐帶によつて連結される傾向がある。人間の關係に於て反對と連結との孰れが主たる關係であるかと言へば無論連結であることは疑ない。人類は最初から連結關係を有する。或る連結關係の一團と他の一團とが接觸するとき、初めて其等の間に反對關係を生ずる場合多きも、次で一が他を征服するときは其等の間に支配的連結を生じ或は二者の勢力が均衡を保

つときは自然に相俟つ所の依賴的連結を生ずる。尙ほ或場合には其等が初より反對關係に立たないで各一團に屬する箇々人の間に財貨の交易其他の連結關係を生じそれが廣まつて二者を連結せしめることもある。反對と連結との關係は、多くの社會學者の間に種々の論争があるやうに、尙ほ考究を要する重要な問題となつて居るが今は其處に立入らない。こゝでは簡單に、人間の關係が連結に始まり反對を経て復た連結に達するものであることを一言するに止め専ら連結關係の分析に歩を進めたい。

かくて人間の關係に於ては主として連結關係を見なければならぬが、その關係には更に連絡關係と結合關係との細別がある。前者は賣買に生ずる如く單に人と人とを連ねるだけであるが、後者は組合に見る如く人々が結付いて組織を生じ一團を成すものである。連絡關係は結合關係の中にも存するが、それは結合と並稱される連絡ではない。結合に入らない連絡は例へば國民間の初期の貿易の如く結合の一團と一團との間に起るものであるが、この連絡が包括的・繼續的になつて來ればやがて兩者の間に組織を生じて一の大なる結合關係を構成するに至る。人類原始の連結關係に於て連絡と結合と孰れが根本的のものであるかは疑問であるが、連結の歸着點が結合なることは確實である。この點より見て私は人間の關係の重點を結合關係に置きたい。

結合關係は必然に分立關係を伴ふ。結合は總體に着眼せるものであり、分立は各箇に注目せる

ものである。この二者の關係は恰も「人」といふ文字の形象の如く實は一つの關係を二點より見たるに過ぎない。人々は分立しながら結合し、結合しながら分立し、唯だ場合によつて一が他に比して際立つて目に付くだけである。例へば一家族に於ける生産勤勞の分擔は結合の點がよく見え、社會に於ける無統制の産業分擔は分立の點がよく見えるやうなものである。この結合と分立とは孰れを採つても差支ないが、人々の關係を明示するものは結合であるから、我等は分立關係を包含するものとして結合關係を取扱ふのである。而して人々の結合せる組織體を最も抽象的に呼ぶときには、團體といふ語が最も適當と思はれる。この語は一時限りの小さい參詣團體から永續すべき大なる世界團體までも包含する。私は今、人生の境涯に就て、團體のみを問題とする。

歐羅巴語では會社・組合・學會・俱樂部なども社會と一所にして Society, Société, Gesellschaft と呼ぶから、この語が一切の結合組織體を包含する最も抽象的な名詞となつて居る。されど國語では會社や學會などを社會と呼ぶ用例はない。Gesellschaft とは言ふが、聖徳太子奉讃社會とは言はない。

四 基本團體と派生團體

團體は人間のあらゆる結合組織體を包括する抽象的概念であるが、我等は今團體の存立する理由より見てこれに最も根本的な區別を立て得る。その一は人々が一切の生活を總括する所の人

格を擧げて結合する團體であり、その二は人々が或特定の生活事項に限れる所の事業に關して結合する團體である。前者は人格者としての個人の結合であつて人間の存在と終始する基本的のものであり、且又他の一切の團體よりも先在して諸團體を支持する基本的なるものであるから、これを基本團體と名づける。後者は人々が種々の生活目的を實現するに當り基本團體のみを以ては不充分なりとなし、更に人格より分派せる事業を内容とせる結合組織體であり、且又それは先在せる基本團體の中に派生せるものであるから、これを派生團體と名づける。又前者は結合の内容たる生活目的が限定されず、如何なる目的をも必要に應じて取入れ得るが故にこれを普通團體と呼び、後者は特定の生活目的を實現するに止まるが故にこれを特殊團體と呼ぶも差支なからふ。更に前者を人格團體と云ひ後者を事業團體と言ふもよからふ。こゝで人格と云ふは狭く解し略ぼ箇々人の自我そのものを指し、又事業と云ふは廣く解し種々の生活目的を實現する自我發動の業態を指す。尙ほ又、基本團體が人格的結合組織なりと云ふは必しも其が全く事業を營まないと云ふ意味ではなく、否寧ろ太古の血族團體の如く未だ派生團體を伴はない場合には、基本團體が一切の事業を包括的に行つた。後に生活が複雑となり種々の派生團體を生ずるに及んで事業は次第にこの種の團體に委ねられ、この分化の迹より見て逆に人格的結合としての基本團體の存在を明かにするを得るとも言へる。

基本團體は人類の發生とその起源を同ふし、又永久に人類の生命と終始する團體である。人々は生れながらにして何れかの基本團體に加はり、例外的には所屬團體を變更・得る。全く基本團體より離脱することは出来ない。従つて基本團體は初から人々が團結しようとする意志の實現されたものではなく、自然に發生した團體であり、唯だ團體の成立後に於て人々は團結をなせることを意識し次でこれを發展せしめようとする意志を懷くに至るのみ。然るに派生團體は概ね會社・組合・學會・教會・政黨・俱樂部の如く、特定の生活目的を實現するに當りて同志者の結合する團體であるから、これにあつては人々の意志によつて幾何でも多種多様なものが設立され又は解散され、又人々は已設の團體に加入し又はこれより脱退することが出来る。但だ人々は地方自治團體の如き基本團體の組織の一階層として存するものからは脱離し得ないが、この團體とても基本團體によつて廢止され得る。されど基本團體は分解されて二以のものとなるか又は結合されて一つのものとなることはあつても、基本團體そのものは廢滅されることはあり得ない。

人類は最初には基本團體を有するに過ぎなかつたであらふ。否寧ろ派生團體なき時代には基本團體とも稱し難い一つの人格的兼事業的團體が存するのみである。生活が單純である時代にはそれにも差支なかつたことは、譬へば下等動物が細胞組織によつて生存機能を營めるやうなものである。然るに生活が複雑となつて派生團體の設立を促せることは、恰も高等動物に特定の機能

を營む種々の器官を發生せしめたこと、類似して居る。派生團體には直接に基本團體より分化し來りてその構成單位となり又は基本團體の運營機關として成立せる從屬的團體もあれど、多くのものは基本團體を基礎とするのみにて箇々人が新に開展し増進し來れる特定の生活目的を實現する爲に創設したる自主的團體である。この自主的派生團體が更に基本團體に吸収されてその直接の構成單位又は運營機關となるならば、其は恰も高等動物の組織が細胞組織と器官組織との合體せるやうに、我等の團體も實質的には一つのものとなつてその中に基本組織と派生組織との並存及び合成を見るに至るかも知れぬ。例へば多くの私設鐵道會社が存する間は其等は皆自主的派生團體であるが、鐵道事業が總て公營となつて鐵道省の經營に屬するに至らば、鐵道省はもはや派生團體ではなく、唯だ大團體中の一の派生組織に過ぎないものとなるが如きである。かゝる過程が總ての生活内容を包容するまでに擴大された結合組織は謂ゆる廣い意味のコンミニズムであるが、その實現如何は輕々しく斷定し難い。

團體に就て起る問題の中でも最も喧しく論争されるものは團體と個人との關係であるが、この關係も亦基本團體と派生團體によつて著しく趣を異にする。派生團體は人格そのもの、結合ではなく人格の分派たる事業に關する結合であるから、團體の構成者は人格者個人でなく事業者個人である。事業者個人は派生團體と同位に居り、これと運命を共にするが、人格者個人より見れ

ば派生團體は一定の生活目的を實現する機關に過ぎない。例へば株主の地位は會社と同位にありて而かも箇々の株主は總ての株主より成れる會社の要求に従はなければならぬが、併し會社は株主たる者の人格の結合でないから人格を左右する力を有しない。之と異り基本團體は人格者個人の結合であるから二者は同位にあつて、而かも一々の個人は人格に關しても、總ての個人より成れる基本團體の要求——自然的機制又は意志的統制——に従はざるを得ない。基本團體は如何なる意味に於ても個人の生活の機關ではなく、總ての個人の力を以てするも存在そのものを左右することの出来ない人生の基本的境涯である。そこには個人が存在すると終始して團體が存在する。唯だ意識の方から言へば團體自覺よりも先きに個人自覺を生ずるが故に、我等はその自覺による意志に立脚して箇體的自我を個人と呼びその個人の結合を指して團體と言ひ、かくて團體よりも個人が先在するものと考へる。この見解が墮落するとき、基本團體をも尙ほ個人生活の機關であるかのやうに見誤るのであつて、個人主義の思想には上の如き誤謬が珍しくない。尙ほこれと聯關せる謬見は人格者個人を以て基本團體に従屬するとなす見解である。この見解は基本團體そのもの、本質と團體の組織の中にて一々の個人が自然的に支配せられ又は意志的に統制せられる状態とを混同せるによるのである。

基本團體は人格者個人にとつては、一連ではないが謂はゞ一連托生の境涯である。この境涯と

しての團體はそれ自ら獨立して居る。派生團體は基本團體に依屬し、少くもその基礎の上にのみ存在し得るが、基本團體は他の如何なる團體にも從屬又は依存しない。蓋し人格を擧げて結合せる團體が更に他の團體に從屬し依存すると云ふことはあり得ないからである。但しこの基本團體が獨立すると云ふことは、現代の世界交通に面するに至つて頗る複雑な解釋を必要とする事情を生じた。

基本團體はもと世界の各地に起れる血族團體に始まり、その後度々の分合が行はれて今は大體に於て民族の血縁及び文化を基礎とする國民團體に達して居る。國民團體は一つの基本團體の中に多數の派生團體を包容して其々獨立の存在をなして居るが、この派生團體が人々の關係及び生活の交渉に於て重要な役割を演じて居る點を顧みるときは、國民團體は基本團體と派生團體とを合せたる全團體であると云つてもよからふ。唯だ一の國民團體が他の其に對して獨立を保持し居れる點に着眼するときは、基本團體が國民團體を表現して居る言はなければならぬ。

現代の國民團體は其々一定の領分を限つてその内に意志統制を行ひ、その點に於て獨立の存在を保持して居る。然るに是等の國民團體も生活に於ては必しも獨立しないでその間に包括的、繼續的交通をなして相需め相供へ、已に一定の組織を有するほどに緊密なる結合をなして居る。今日已に全人類を包容する世界團體が成立して居ると見るは必しも早まつた見解とは言へない。世

界人の語は造られた觀念を指すのでなく現實を反映せる觀念を表はす。唯だ問題となるはその世界人が人格者個人なるや否や、換言すれば世界團體は基本團體を具有するや否やの點にある。世界に亘る派生團體は會社・組合・學會・教會などその種類及び團體數に於て次第に増加しつつあるが、世界には是等を包容する基本團體ありと見るべきか、若くは多くの國民團體より成れる結合組織體は多數の基本團體の外に立てる一種特別の派生團體と見るべきか。若し世界團體にも基本團體ありとせば、人格者個人は國民團體と世界團體との孰れに向つてその人格を結付けて居るかと云ふ極めて深刻なる問題に面しなければならぬ。併しこの問題を考ふるに於ては先づ基本團體と結合組織を明かにしなければならぬ。私はその組織を共同組織と相互組織との合成であると思ふ。而してその組織の考察は順序として先づ國民團體に就て試みなければならぬが、我等は其處に至つて始めて國家と社會との並立を發見するのである。國民團體と世界團體との關係を取扱ふことはこの一小篇の企圖する所でないが、國民團體の結合組織を究明し行くときは、自ら如上の關係をも或程度まで明かにすることゝなるであらふ。(其一終り)